

和歌山病院での実習を終えて



清水 俊樹

私は2/27-2/28の2日間にわたり、国立病院機構和歌山病院にて実習させていただいた。和歌山病院では病棟の一角に結核病棟をもち、実習内容としては結核に重きを置かれた一方で、画像読影や酸素投与方法など、呼吸器科の診療における基本的な知識・考え方を確認する良い機会になったと思う。

和歌山病院に到着してほどなく、駿田副院長から結核の感染についてのセミナーがあり、他の呼吸器疾患との違いや空気感染対策に用いられる N95 マスクについて、実際に装着することができた。2日目にも結核についての講義があったが、結核の画像所見を含め、より深く理解することができたと思う。ほぼ空気感染しかしない・必ず多剤併用で治療を行うなどの知識は医療者として当然持っているべき知識といえるが、全身疾患としての結核の患者さんを診たときにまず鑑別に挙げることができなければ誤った対応をして多くの犠牲を払うことにつながりかねない。患者さんが呼吸器科で受診しなくてもとにかく考え続け、疑いの目を持つことが重要だと再認識できた。

画像所見、といえば、2日間にわたり南方院長から受けた正常胸部 X 線、異常所見についてのセミナーが印象深い。私たちは4年生の臨床講義において X 線画像についての基本的な講義を受けないまま臨床実習に入ったこともあり、大まかに「浸潤影っぽい」「空洞っぽい」とは考えても、線がどういったときにできるのか、どこに注目して見ればいいのかはわからなかったと思う。このセミナーを9人+院長の大人数で行えたことで、様々な角度から X 線撮影の原理に触れることができた。X 線の画像といえば CBT を終えても本当に特定の疾患が「ある」と言われて「あああるなあ」程度にしかわからなかったが、今回の実習を通して、画像を読むための基礎は築けたのではないかと思う。

酸素療法についてのセミナーは実際にマスクを着けながら行うことができ、非常に参考になった。臨床の講義でイメージが湧かないまま「ああベンチュリーマスクって流量を細かく調整できるんや」と思っては記憶から消えていったのが、百聞は一見に如かずとはよく言ったもので、実物を見ることで記憶に定着していくのを感じた。

この実習を、臨床実習の初期に行えて良かったと思う。レポートに追われて覚えるだけの勉強や作業に溺れるのではなく、多少回り道になったとしても基礎から理解してしっかりした考え方を基盤に持つことにつながる。それは今後患者さんと接し、患者さんを理解

するうえで何より重要なことだと思う。最後に、美味しいお食事にも連れて行っていただいた南方院長をはじめ、実習でお世話になった和歌山病院の皆さん、ありがとうございました。